

<p><研究課題名></p>	<p>D-1004</p>	<p>魚介類を活用したトップダウン効果による湖沼生態系保全システムの開発に関する研究</p>		
<p><研究概要></p> <p>今日の琵琶湖に見られる水草の異常な繁茂や漁網の汚損などの現象と魚介類の生息量減少や種組成の偏りとの因果関係を検証し、それらに伴う生態系サービスの経済的損失を求めたうえで、費用と便益を考慮し、琵琶湖を代表とする湖沼の生態系を健全に保全し、我々が従前と同様の生態系サービスを楽しむことができる、魚介類を活用した生態系の修復技術を開発する。</p> <p>(1) 水草の異常繁茂の状況把握とメカニズムの解明に関する研究 南湖を中心に異常繁茂する水草の種、量を把握し、近年の異常繁茂メカニズムを明らかにする。</p> <p>(2) 漁網への付着の増加等、生物生産過程に見られる変化の現状把握と原因の解明に関する研究 定置網や刺し網などの漁網に付着生物が多量に付着する現象の現状を把握し、著しい汚損が発生するメカニズムを明らかにする。また、湖水中の窒素、リンなどのバランスを調査し、生物生産に及ぼす栄養塩バランスの影響を明らかにするとともに、下水道処理排水が栄養塩バランスに及ぼす影響について把握する。</p> <p>(3) 生態系サービスの損失額の推定に関する研究 水草の異常繁茂や漁網への付着の増加等、近年琵琶湖で発生している多様な生態系異変現象によって生じている、様々な生態系サービスの損失額を算出する。</p> <p>(4) 魚介類の生態系保全機能を活用した湖沼生態系の保全技術開発に関する研究 魚介類が有する湖沼の生態系保全機能を検証すると共に、湖内に生息する魚介類のうち基礎データの豊富な魚介類（①ビワマス、②アユ、③セタジミ、④ニゴロブナ、⑤ホンモロコ）の現存量把握手法を確立し、現存量を推定して環境改善に必要な魚介類の種類と量を算出する。さらに生態系サービスの損失額の推定結果もふまえて、便益が費用を上回り、持続的に生態系サービスの恩恵を楽しむことができる、魚介類を活用した生態系の具体的な管理方策を提言する。</p>				
<p><研究代表者></p>		<p>藤岡 康弘</p>		<p>滋賀県水産試験場・場長（55才）</p>
<p>No.</p>	<p>サブテーマ名</p>		<p>氏名</p>	<p>所属機関名・部局・役職名</p>
<p>(1)</p>	<p>水草の異常繁茂の状況把握とメカニズムの解明に関する研究</p>	<p>○</p>	<p>芳賀裕樹</p>	<p>滋賀県立琵琶湖博物館・研究部生態学研究領域・専門学芸員</p>
<p>(2)</p>	<p>漁網への付着の増加等、生物生産過程に見られる変化の現状把握と原因の解明に関する研究 ①漁網への付着物モニタリングと水中懸濁物が漁網に付着する機構および湖水の栄養塩バランスの現状把握に関する研究</p>	<p>◎</p>	<p>藤岡 康弘 亀甲武志 大前信輔 森田 尚 大山明彦</p>	<p>滋賀県水産試験場・場長 滋賀県水産試験場・栽培技術担当・主任技師 滋賀県水産試験場・環境病理担当・技師 滋賀県水産試験場・環境病理担当・主任専門員 滋賀県水産試験場・環境病理担当・主査</p>
<p>(3)</p>	<p>生態系サービスの損失額の推定に関する研究</p>	<p>○</p>	<p>三田村緒佐武 玉置 泰司 栈敷 孝浩</p>	<p>滋賀県立大学・環境科学部環境生態学科教授 水産総合研究センター中央水産研究所水産経済部動向分析研究室長 水産総合研究センター中央水産研究所水産経済部動向分析研究室研究員</p>
<p>(4)</p>	<p>魚介類の生態系保全機能を活用した湖沼生態系の保全技術開発に関する研究</p>	<p>○</p>	<p>西森克浩 田中 秀具 太田滋規 根本守仁 三枝 仁</p>	<p>滋賀県水産試験場・生物資源担当・専門員 滋賀県水産試験場・生物資源担当・専門員 滋賀県水産試験場・環境病理担当・主任主査 滋賀県水産試験場・栽培技術担当・主査 滋賀県水産試験場・栽培技術担当・主査</p>